

二十七 戦後の運動

昭和二十年八月十五日、終戦の詔勅を山梨県の山村で聞いた私は、非常な感動に襲われた。この瞬間に一閃、長い民族的悪夢のうちに眠っていた真の日本精神が輝いたように感じた。私は取るものも取りあえずその翌十六日東京へ戻ってきた。今こそ無政府主義実現の秋が来たかと直観したからである。

この信念は終戦後半歳の間、指導階級と称する徒輩の言動を観察すると共に強くなった。彼等はこの未曾有の国難に際して、ただ自分達の利福、党派欲、閥欲を満足せしめんがために、喧号叫喚して国民をますます混乱の深淵に追い込もうとしているに過ぎなかった。

この有様を見過し得なくなった私は全国に散在している同志諸君を初め、全日本の国民、特に青年に訴えようと考へ「無政府主義宣言」〔本著作集 第四巻所収〕起草した。たまたま各地に散在していた同志間の連絡もとれ、疎開先から東京に戻ってくる人達も多くなり、無政府主義者の全国的な団体結成の気運が

たかまつた。

昭和二十一年五月十二日に結成された日本アナキスト連盟に、私は大きな期待と情熱をかけた。結成大会の席上、私は今日ほど無政府主義が光明として語られる時はないであろうと語り、今日の日本と日本民族とを救うべき道はただ無政府主義の原理を実行するにあるという日頃の信念を吐露して、同志の奮起を促した。これと同時に連盟は機関紙として『平民新聞』を発行することになり、同年六月十五日にその第一号が発刊された。

こうして発刊された『平民新聞』と共に、各地で活潑な運動が展開された。私もその一員として文章を以て、また講演に、地方行脚に全我を傾けてアナキズム思想の宣伝に努めた。以下にかかげるのは、その旅行記として『平民新聞』に寄せた一部である。

〔……〕十一月四日には北佐久郡御牧原の小山四三君の迎へを受け、美しい馬に乗せられて、二里ばかりの山道を谿谷を辿り、まさに二十一年目で同君の家庭に着いた。実を言ふと、二十年前に農民自治会のために同志大西伍一君とともに行つた際には、小山君はまだ独身の青年で、同じ独身の関和男君とともに、あの高原に一軒の小屋を借りて開拓の鋤を握り始めたのであつた。それが、今日では、関君も小山君も立派な家を建て、幾人かの子供の父となり、自作農として健全な農村指導者となつてゐる。この家に迎へられて、私は余りの嬉しさに、涙さへ禁じ得なかつた。その夜は小山君の家から二十丁も隔つた公会堂に馬上で導かれ、大炬の炎々たる薪火を囲んで、文字通り炉辺

談話会が開かれた。楽しい集ひであつた。ピラミッド型の政治組織の下にあつては、何時までたつても農民は社会の下積みとなつて日の目を見ずに一生を終らざるを得ないことなど物語つた。政府は最大の浪費者、官僚は農民の血を吸ひ上げる機構に過ぎないことなども語り合はされた。この夜は小山君の家に一泊、翌日関君の来訪を受け、別れを惜みつゝ、再び馬で滋野の唐沢家まで送られた。往復とも、紅葉たけなわの風光絶佳な眺望を満喫した。「……」

どの会合に於ても同様であつたが、「無政府」といふ言葉が今日の一般人の思想的間隙に向つて大きな光明となつて照入する光景は、従来曾て経験したことのない素晴らしい事実であつた。私は「無政府主義時代来る！」と衷心から叫ばざるを得ないほどの感激に終始満されざるを得なかつた。〔農村座談記〕より。昭和二十一年十一月二十三日)

このように信州から山梨、静岡へかけては殆んど毎年講演に出かけたが、昭和二十三年三月には私の郷里、旭村山王堂の有志から村民のために一席のお話をとられた時は非常な感激をおぼえた。私はその時の模様を『平民新聞』に次の如く記している。

三月二日、所用あつて埼玉県本庄町で用事を済ませて故郷の旭村山王堂に行くと、土地の一中堅人が一席お話ししてくれるか？という、七十歳を過す今日まで曾て郷里の人からこのような提言を受けたことはなかつた、これも時代の浪だ、しかし私は明早朝帰京しなければならぬ、今夜ならば

喜んで皆さんと会おうと答えた、既に日は暮れていた、甥の家で夕飯を喫していると「是非今夜少数の者にお話を聴かせてくれ」と申込まれる、昔から知識の問題や思想の問題には全然馬耳東風であつた私の郷党にこうした意向を聞くことは、私にとつては破天荒の喜びであつた、私の成長する頃は維新革命に続いて産業革命の影響で極端に貧困の底に零落した村であつたが、近頃は機械業の勃興によつて村家の光景は一新された、今夜の会場も安保提督の疎開していた家とのことで、立派なお座敷であつた、私はそこで丁度一時間アナキズムの概略をお話した、全く処女地であるから、どんな成果を結ぶか未知数であるが、私にとつては嬉しかつた(昭和二十三年三月十九日)

越えて七月七日、私は大阪の小松亀代吉君からの交渉で福山市の無政府主義講座に出席すべく東京を發つた。丁度この時アナキスト連盟青年部の伊福部舜児君が、広島県三原市に行く用事があつて、この旅行の大部分を共にしてくれたことは私にとってこの上もない喜びであつた。

乗車一切の世話を伊福部君が担当してくれたので、私は何の心遣いもせず最好の座席を与えられて、七夕祭りの飾り竹の樹てられた沿道の静かな美しい眺めを満喫しつつ東海道を進行することが出来た。

朝六時に東京駅を發して大阪駅に着いたのは日暮頃であつた。大阪駅頭には例の『平民新聞』のサンドイッチを胸にかけた小松、猪股両君が出迎えて、大きな声で呼びかけてくれた。それから両君のとても熱心な握手に接して、大いにど肝をぬかれ、且ついささか興奮した。

同夜は小松君のところに泊めて頂き、終日の窮屈から癒されるべく手足を伸ばした。八日は終日休息、近所のお寺など詣でて戦災を免れた静閑な境地に杖をひいた。九日は予定の福山に向う日、小松君は早朝五時に猪股君と伊福部君とを伴うて大阪駅に乗車番号を取りに行く。私は老人の故を以て、朝寝の特権を与えられた。

十一時、大阪始発の汽車に乗るべく、京都から来合わす小笠原、高橋両氏を駅頭に待つ。間もなくお二人が見え、乗客は長い行列を作つて駅員先導の後に従う。それは全く牧場の羊の群れと異ならぬ。幸いに万事好都合に運び、京都のお二人と小松、伊福部、石川の三人と相隣りして座席を占めることができた。汽車が加古川を過ぎる頃であった。車内の一方から一きわ声の高い演説が聞える。見れば姫路の向井君であった。小笠原氏は高く手を挙げてさしまねく。向井君は宣伝をやめて吾々に近づいてくる。思い設けぬ嬉しい邂逅であった。向井君は長く車中に止まるわけにはゆかない。後の再会を期して下車してゆかれたのは姫路駅であった。

吾々の汽車はそれから幾時間か西方に走つて、福山市に降り立ったのは午後三時頃であった。福山市の講座は二日続いた。小笠原氏は弁証法に就て、ギリシャ時代の哲学者達のこの語の使い方、考え方から説き起し、詳細に丁寧に、精確に、説き去り説き来つて万人をして納得せしめねば已まぬという気魄が窺われた。勿論それはマルクス主義者の弁証法的歴史観の誤謬を徹底的に論破するのであった。私の講演は西洋のルネサンスと日本の近代思想の発展との関連を説き、世界の社会思想上に於ける無政府主義思想とその運動との重要な地位とその将来とについて私の考えるところを簡略に述べた。

のであった。福山は森戸文相の故郷で、同志種本君の事務所にも森戸君の「無政府」と書いた額が掲げられてあった。

十三日は広島島の栗原家に導かれた。講演会や懇談会に三日をすごし、十六日払暁、栗原君一家に見送られて岡山市に向つた。岡山駅で高畑君を迎えられ、電車で市中を行進する間に町名や停留所名にクラシクな床しい名称の多いのに感興をそそられた。「中納言」なんて停留所はその中でも秀逸なものであった。同夜は高畑家に厄介になり、翌十七日午後から土地の人々の小集が開かれた。十八日には玉島町に逆行し、堀口幾久太氏邸の小集に列席した。十九日早朝、われわれは堀口家を辞し、一たん岡山駅に下車、高畑君宅に引上げて数時間の睡眠をむさぼつた後、再び高畑君と仁美嬢に見送られて姫路市に向つた。姫路駅には向井君が出迎えてくれ、更に支線の汽車で一丁場行き亀山町の向井君の家に着いたのは夕方であった。折しも雨が降り出したので小笠原君が雨外とうを持って姫路駅まで飛んでくれたのだが、行きちがひになつて気の毒だった。私はチェンバレンを真似るわけではないが、ステッキ代りに傘を持って歩くので、今度は幾度も傘の御利益を蒙つた。

二十日の午後から晩にかけて向井家に座談会が開かれた。当夜の会合はまことに賑やかな、よい集りであった。遠い神戸からも二、三の同志が来援する。近所のお寺の住職さんも参加して下さる。旧いギロチン社に關係した小西老も盛んに論議に花を咲かせる。姫路高等学校の学生さんがこの中にある頻りに質問の矢を放たれる。高等学校に今共産党が八十名もいますが、アナキストはいない。それはどういふわけでしょうか、という。それは当然のことです、と私がいうと、諸君は一せいに、そ

れはどうしてですか、と問う。私は答えた。今日の日本の国家組織も教育制度も、いずれもピラミッド型を以て成立し出世主義を精神とする。それが共産主義のソビエト国家組織と一致しているので、高等学校に進学するという精神と、共産主義者になるという意向とはびつたり一致するのです。然るにこのピラミッド型の組織を根底から覆えて、平等の網状組織を樹てようとするアナキズムに来るには、先ず精神的革命が必要です。ここに、アナキズムの伝播に困難があるのです。平民はそのままにしてアナキストになれるが、高等インテリは、先ず自分の生活精神から革命してかからねばアナキズムに進入し得ないという難関があるのです。従ってアナキズム革新運動の最大障害となるものは、この高等知識階層に多いのです。という私の答えには、会同諸君いずれも同意らしく見えた。

〔補注〕

尚各所で、これに類した質問が出された。私はこれに対して、次のように答えた。

「アナキズムは純粹の人道の精神から入らなければならない思想であって、些かも野心の潜入すべき余地がない。議会に行くも非、政府に行くも非、況んや政權獲得を企図する如きは最大の墮落なりとするアナキズムに於ては、所謂青雲の志を懐ける氣鋭の青年諸君の活躍すべき分野が存在しない。

此の如き性質の思想であり運動であるから、そこには功利的精神の動く余地がない。功利的精神が動き得ないわけではないが、併しその功利的精神は世間通俗の意味とは全然異つて、それは芸術の効

果を思ふの精神と同一である。従つて、アナキストの精神は、未來社会の幸福を欲求するの熱情よりは、寧ろ現実の生活と行動とに美を感じ、その生活に感激することにより、多く幸福と光榮とを見出すのである。

併しながら、こうした感激は、純粹な青年時には芳烈な香氣を放つて、幸福な犠牲生活を実現するものであるが、動もすれば忽如として変化し或いは挫折し易きものである。吾々が宗教的献身を以て一生涯これ捧げるには大は以て宇宙の無限に徹し、細は以て極微分子の生活を極め、而して名匠が大建築を企てると同様な科学的精確さを以て、この事業に携わる必要がある。アナキストの事業は絶大なる創造の芸術だからである。且つその大建設は全大衆の綜合的芸術として、生活そのものの芸術として、殆ど無限に發展して已まないものであるが故に、強權も執着も利慾も許されず、唯だ献身の幸福のみが存在するからである。

アナキズムは個人的自我の自由を最も尊重する。生活美の發展は唯だ此条件によつてのみ得られるからである。機械的唯物論に於ける個性の奴隸化は、自由の精神に反するのみならず、實に自我の美的感激を圧殺するものである。アナキズムに於ては、個性の自由と全大衆の綜合生活とが宇宙的相互連帯によつて美事な綾羅となつて織り出されるのである。

實際に、六、七千年間に亘る人類の歴史を顧みても、その人類が追求して来たものは『美』である。美の光明である。人類の解放とは、暗影と醜惡と迷妄との群生する深林中に輝やいている『美』そのものを解放することである。『葦原中国悉闇。万妖悉発』の時に、天の石屋戸にいます天照大神の出世のために努力することである。一語にして云えば、光の解放である。そして天と地とに連なる無辺の自由の光の殿堂を作ることである。」

こうした山陽二十日間の旅を終え、大阪発帰途に着いたのは二十七日の夜十時であった。この汽車に乗り込むまで常に何かと私の身边に注意してくれたのは小松亀代吉君であった。深い同志愛に浴して勿体なく感じたと同時に、老年者は余程の必要がなければ旅行など自粛すべきだとも感じた。同志の厄介になること一通りや二通りではないから。

この旅の間に話のまとまった『エリゼ・ルクリュ 思想と生涯』はその九月に発行された。私はエリゼ・ルクリュの伝記を書く事は、喜びでもあったが、また内心苦痛でもあった。というのは、エリゼ自身多くの人の囑望にも係わらず、「自伝などは書けない」とて筆を執ろうとしなかったし、その相続者ポール・ルクリュがまた「エリゼ自身が書かなかったものを、私が書くわけにはゆかない」として他の希望をしりぞけた。そのポールの弟子格である私が、この冒険を敢てするのであるから、私の内心が平かでないのは当然だ。けれども西欧から遠く離れた、人情風俗の非常に異なった日本の社会に、この異色ある人物を紹介することは、また言い知れぬ喜びでもある。ルクリュ一家に対しては冒瀆であるかも知れないが、日本に対しては勲功であるとも言えよう。こう思って私は筆を執った。

また同年十一月には『近世東洋文化史』を世に送ることができた。私はその序文に次のように書いている。

本書は拙著『東洋文化史百講』の第四巻として執筆したものであるが、今度発行所も変り、時勢も変り、戦前の三巻の継続としては、時間も余りに隔たつてあるので、従つて本書の名称も単行本

の形を採つたのである。前著三巻に本書二十三章を加へると九十六講となり、百講にはなほ四講を欠くのである。腹案も資料も既に備へてあるが暫らく時機の到るを待つことにする。

〔……〕私が東洋文化の歴史を研究し始めてから丁度十二年目になる。六十歳になつて始めた仕事で遅々として進まなかつたが、そして甚だ不完全ではあつたが、兎も角も結末まで辿り着くことが出来たことは心中に多少の喜びを感じなくもない。それは時間との競争、年齢との競争に一先づ勝つた喜びなのである。

本巻にも数多き写真版を挿入する予定であつたが、当今の印刷情勢では、それが甚だ難事であることを知つて、全部割愛することにした。これから一般事業界の復興と共に印刷業並びに出版業も正常の状態に復し、美しい写真版を加へて読者の眼を喜ばすと同時に、理解を明確ならしめ得る時が一日も早く来らんことを私はここに念願する。更に同時に、古代よりの全部を揃へて改めて出版し得る時勢が到来したならば、どんなに愉快なことであらう。〔……〕

この年昭和二十三年十二月十三日号で吾々の『平民新聞』は百号を迎えた。もともと無一物から始めた仕事の上に、あの厳しいインフレの中での発行は並たいていの事ではなかつた。直接編集事務に當つた諸君の努力はもとより、新聞販売に挺身した多くの同志の熱誠がなかつたら、とてもこの難事業は成し遂げられなかつたらう。私はこの百号を祝し、「天下に誇れ」と題して次のように同紙に寄せている。

『平民新聞』いよいよ百号になる。あわたくしとむかえる百号ではあるが、かえり見て感慨なきを得ない。〔……〕

無政府主義の戦いは永遠である。『平民』紙の百号など、もとより問題とするに足るまいが、同志諸君が自らの協力によつて、これまで育てあげたことを、ふりかえつて見ると、いさゝかほゞえましくも感ぜられるであろう。過去三年間に多少の波らん、多少の曲折もあつたが、アナキストらしく極めて地味に極めて清潔に、この新聞を守り通した点は、これを天下に誇つてもよくはないか。

この『平民新聞』百号記念を祝して間もなく、私共は吾々のよき友、よき同志であつた遠藤斌氏夫人千鶴さんの死に会つた。これは吾々の難事業に捧げられた尊き最初の犠牲であつた。昭和二十四年二月、私は信州から静岡へかけて講演旅行をしていた時、千鶴さんの計の急電に接し急ぎ帰京したが、遂に遺骸に会うことはできなかった。次にかかげる一文は「千鶴さんを讃へる」と題して『平民新聞』に投じたものである。

われらのよき友、千鶴さんは逝去した。二ヶ年に亘る長い重病と闘つて、何としても生きぬかうと努力して来た彼女は、絶えず襲ひかゝつてくる病魔のために遂に力つきて倒れ去つたのである。貧しきわれらは、心を尽して彼女の回復を祈つたのであるが、無力でどうすることもできないで、たゞ痛恨の涙にくれるのみであつた。

千鶴さんは、われらのよき友、よき同志であつた。すべてに貧しいわれらにとつて、彼女はまことに過ぎたる友、過ぎたる同志であつた。思へば千鶴さんの死は、わが『平民新聞』のための最初の犠牲であつたとも言へる。『平民新聞』は最初無一物のアナキスト連盟で計画せられ、週刊とはいうものゝ或は二週に一回、或は三週に一回しか発行せられず、それも不安定にして何時か人知れぬ間に消えて無くなりしやせぬかと危惧せられたのであつた。誰もこれを一身に引受けて守りたてようと挺身してくれそうになかつた。たゞ当時平凡社に机を並べて勤務していた、近藤、遠藤の両君はこの風前の燈のような新聞を何とかして守りたてようと無言の意気投合にまで到達した。月給は平凡社から貰ひ、仕事は『平民』紙の編集発行で一ぱい、というのが両君の生活であつた。こうした事実が一昨年のもまで続いた。『平民』紙が漸やく世間にその存在の事実を認めしめるに至つたのは、実に両君の努力に負ふところが多大であつた。

この間における千鶴さんの活動には涙ぐましいものがあつた。平凡社とともに山梨県に疎開してゐた遠藤君は東京の平凡社に帰へり、『平民』紙の編集を担任するに至つても、住居は定まらず、転入の認許は得られず、極めて不安定の生活の中に、平凡、平民、両社兼ね合いの曲芸を演じなけ

ればならなかつた。千鶴さんは、その不安定な生活の中にあつて、よく遠藤君を助け、その全身全力を尽して『平民新聞』の発行を可能ならしめた。転入手続きができず、配給を受け得なかつた時分には、彼女は単身秋田県にまで飛んで行つて食糧を獲得して来るのであつた。若い女の身で、二斗の米を背負つて、夜汽車の洗面室内に立つたまま三十時間も乗り続けたことが、一度や二度ではなかつた。共産党主催の講演会などがあると、彼女はその忙がしい時間を割いて、一かかえの『平民新聞』を持つて行つて宣伝販売することを忘れなかつた。この間にあつて彼女はアテネ・フランセーに通つてフランス語を勉強し、詩興が湧けばそれに没頭し、そして気むづかしい夫君のためによき主婦として家庭生活を楽しからしめた。平凡、平民兼ね合いの遠藤君の編集仕事は、自然に平凡社の事務終了後に廻はされ、従つて徹夜の仕事が非常に多かつた。千鶴さんは昼間の業務に疲労しながらも、また夫君の夜間の机側を去り難い場合が多かつた。

今、千鶴さんの生活を追想すると、殆んどそのすべては犠牲のそれであつた。殊にそれは『平民新聞』のために注がれた彼女の熱愛の迸射に他ならなかつた。彼女はそのため生命までも傾けつくしたのである。若しわれわれの運動が、時の利を得て街頭に溢れ出る場合があつたら、その時は、われらは、その陣頭に美しい彼女の優姿を仰ぎ見ることができたであらうに！ 千鶴さんは遂に永遠にわれらと幽明界を分つに至つた。千鶴さんの思い出は尽きない。千鶴さんの美德を讃へるべくわたしの言葉はあまりに貧しい。ただわたしは真心をもつて彼女の在りし日の面影を忍び彼女の美をほめたたえるのみだ。千鶴さんよ、ゆるせ！（昭和二十四年二月二十一日）

私はこの年、即ち昭和二十四年の秋頃から若い人達と自宅で共同研究会を始めた。数人の男女が毎月一回集つてまことに真面目に熱心に研鑽し、私は非常に嬉しかった。この研究会は二年の後、昭和二十六年九月、大門、大沢両君の援助を得て、私の年来の希望であつた自由の教育の実現を目ざす近代学校に発展した。この校名はスペインのフランシスコ・フェレルの近代学校にちなんで命名したのである。新居格、松尾邦之助、村松正俊、草野心平、鶴見俊輔、唐沢隆三、椿宏治等の諸君も講師になる事を快諾してくれた。教室は朝鮮の同志、丁賛鎮君が本郷の居留民団本部の二階を提供してくれ、講義の時間割も決り、第一回を十月八日に開いた。私が「社会運動の現代的意義」について、鶴見君が「ハーバート・リード」についてそれぞれ講義したが、その頃、朝鮮居留民団本部の責任者の交替で丁君の熱心な幹旋も空しく、遂に吾々は会場から閉め出されてしまった。この近代学校は二回の講義をしたに過ぎなかつた。

その後私は以前から抱いていた思想をまとめた『幻影の美学』の執筆を終り、エリゼ・ルクリュエの大著『地人論』の完翻を決して書斎に籠つた。この間、昭和二十五年に、川合仁君の熱いお骨折で、私の記念の書『西洋社会運動史』の改訂増補第五版の出版が成つた。当時の困難な時代にあつて、この大部の本を出すことは並々の決心では出来なかつたのである。なお同君の御厚意でこの時『歴史哲学序論』の再版も世に出た。

昭和二十六年日本アナキスト連盟は新発足した。その第二回全国大会が大阪で開催されたのは、翌

二十七年五月であった。この大会には周囲の事情が私の出席を許さなかった。私はやむなく同志諸君に送る挨拶を認め、出席の近藤憲二君に托した。それを次にかかげる。

同志諸君

例年の通り、今年の大会にも是非出席する積りで予てから用意していたのであるが、四囲の事情が、どうしてもこの旅行を許さない。残念ながら欠席せざるを得ないことを先ず諸君におわびする。われわれの運動は本来、永久的な性質を持ったものであり、時々の波浪に従って起伏することは、他の社会運動に比べて、より少ないものであるが、しかし或る機会には乾坤一擲の活動を試みなければならぬこともあることを忘れてはならない。波が高くて船の推進機が空転りする時など、その乾坤一擲を思わせて寧ろ興味が深いとも言える。われわれの船も今頻りにその空転りをしていく。世界の波が高いのだ。こんな時も汽罐に火が燃えなくなったら、その空転りすら止まるであろう。われわれは今その危機に遭遇している。所謂大衆に指令する運動の有害無益であることを知るわれわれアナキストは、自らが燃料となり運転士とならなければならぬ。われわれは自らその燃料となることを光榮とする。生命そのものをこれに注ぎ込むことを名譽と感ずる。

われわれの数の増加は単なる量の増加ではない。それは必ず新しい「質」の創造となるべきものである。三と三とは六になるが、三・三が九という算数もある。十と十とは二十になるといふのは社会党・共産党の数学であろうが、アナキズムでは十と十とは百になるのである。これは熱の数学

である。人間性の数学である。熱は光りにもなり音にもなる。原子力の爆発にもなる。それがアナキズムの数学である。

同志諸君、今はわれわれ自身の熱を、より早く、より多く、より密に、一点一刻に集結せねばならぬ時だと僕は思う。そのことを切に諸君に訴える。

昭和二十七年五月一日

石川三四郎